

カトリック山手教会月報

やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>

第632号 2022年10月9日

鈴木真主任司祭 主日ミサ説教

2022年7月31日 年間第18主日 C年
ルカ福音書 12章 13-21節

一見、感じ悪いたとえに見えちゃいます。貯蓄は罪なのか…？みたいな。でも、よく読むと、このたとえに出てくる金持ちは、最初から最後まで、自分のことしか考えてないということにすぐに気づかされます。日本語訳ではわかりませんが、原文だと「わたしの作物」「わたしの倉」「わたしの穀物や財産」というふうに、全部「わたしの」という文になっているそうです。要するに、すべては自分の手柄なのだから、それゆえに、すべてを自分のために使おうとしている。それはそれで、かなり感じ悪いですよね。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。」

確かに、人の欲とは限りなく、恐ろしいものです。本当は、自分の能力、働き、才能など、すべては神さまから与えられたものであるのに、わたしたちはつい、すべてが自分の手柄だと思いたくなります。でも、そんなわたしたちに、神さまは、いつもこう語られているんでしょう。「その、あなたに与えられたものを誰かのために使いなさい。それを誰かと、分かち合いなさい。」

第2朗読の『コロサイ書』で「貪欲は偶像礼拝に他ならない」とあります。聖書において「偶像礼拝」とは、自分に都合のいい〈神〉を自分で作り出してしまうことです。やはりここでも、いつも言うように「神さまは」でなく「自分が」になってしまっ

ているんでしょう。

「神の前に豊かになる」とは、神さまこそが、神さまのみが、わたしたちを豊かにしてくださる、それも神さまの目から見た「豊かさ」に。自分、ではなく、神と人へと目を向ける時、それが見えてくるものなのかもしれません。

「心が豊かになる」のは、誰かと何かを分かち合えた時、誰かと互いに支え合っていることを感じる事ができた時、そして何よりも、すべてそれが神さまのわざであることに気付いた時でしょう。

「神の前に豊かになる」者となれるよう、共に祈りたいと思います。

2022年8月14日 年間第20主日 C年
ルカ福音書 12章 49-53節

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」…一見、イエスさんらしからぬメッセージに思えてしまいますが…〈福音〉がもたらされる時、あいまいでグレーな状態はゆるされなくなる、ということでしょうか。神さまの目から見て、何が正しいのか、あるいは正しくないのか…それがはっきり示される、ということかもしれません。とかく人間社会は、そこをはっきりさせずにグレーなままで何とか成り立ってるところがあるので、はっきりさせられると困る人も大勢いるのじゃないかな。昨今の日本の状況を見ても、現代でもそれは変わらないなあ…とつくづく感じてしまいます。

かつて洗礼者ヨハネは、ヘロデ王に「あんたの結

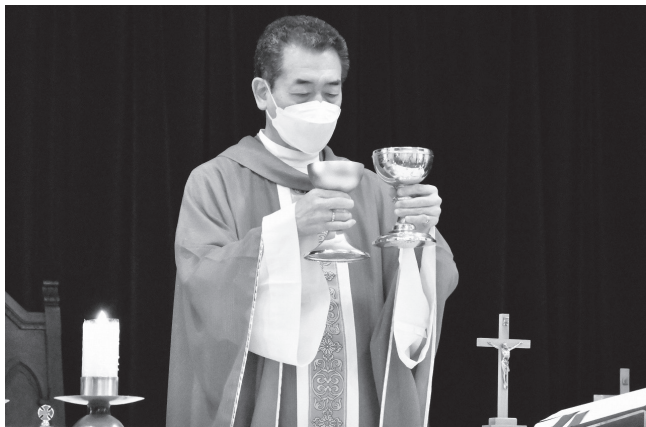
婚は律法違反だよ」と面と向かって非難したがゆえに、投獄されて、はては首を切られちゃいました。イエスの十字架自体もまた、結果的にはグレーであり続けたい人たちがもたらしたものの、と言ってもいいかもしれません。

前にも言いましたが、福音書には、イエスが悪霊を追い出すシーンが時々出てきます。そんな時、決まって悪霊の方から、イエスの存在に反応するんですね。「お前の正体は分かってる！神の聖者だ。我々を滅ぼしに来たのか！」ってな感じで。〈福音〉が示される時、必ずそれに反する要素が反応し、明らかにされる…ということなんでしょう。そして、イエスというお方は、必ずその要素を取り除かれる。どちらの生き方を選ぶのか、そこには中間の「グレー」はあり得ない。だからこそ結果的に、「分裂が起きる」と言われるのかもしれない。

いつも言ってることに当てはめるならば、あくまで「自分が」という生き方に固執するのか、それとも「神さまが」という視点で生きようとするのか…ということになるんでしょうね。

「まあ…そこはいいじゃないですか」と、何かとグレーなままでいたいわたしたち人間ですが、神さまは、いつもそこで何が福音的で何がそうでないのかを示され、その福音に従って歩むようにと促されています。

弱いわたしたちに、イエスに従って生きようとする知恵と力が、いつも与えられますよう、共に祈りたいと思います。



(撮影：編集部 土方芳人)

西村英樹 助任司祭 主日ミサ説教

2022年8月21日 年間第21主日 C年

ルカ福音書 13章 22-30節

今日の福音書は、「東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。」という、すべての人におよぶ「救い」について書かれています。

冒頭の括弧書きにある「(そのとき)」とは、人々の救いのため、エルサレムへと向かっていく旅の途中、つまり十字架の死へと向かう道すがらのことです。町や村々を教えながらめぐっておられる最中、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか？」という人が現れます。自分は救われるのだろうか？それともファリサイ派や律法学者の言うように、多くの掟に従って生きる人や、祝福された金持ちのような立派な人でなければ、救われないのだろうか…。不安な眼差しを向け、質問してきたことでしょうか。これから、万人の救いのため、十字架の死というむごたらしい死へと向かう、すべての人のあがないのために命を投げだそうとされるイエスは、この言葉をどのように聞かれたのだろうかと思います。

イエスは、この人に「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」と答えられます。「言っておくが」というからには、仮に救いに与ることができたとしても、それは「入ろうとしても入れない人が多い」という自分に与えられた恵みの大きさ、無償さを表す逆説的表現を伴うものなのです。

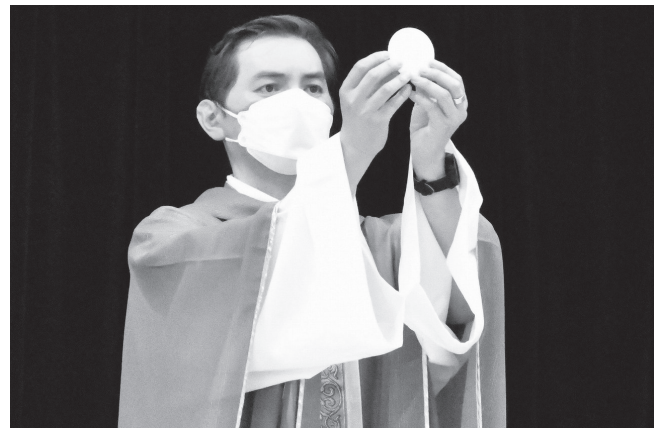
「狭い戸口から入るように努めなさい」の「努めなさい」とは、注解書によると「運動競技者が勝利を得ようとして身体を鍛える努力」とあります。つまり、第2朗読で読まれたような「主の鍛錬」があるということです。鍛えるということは、肉体であればランニングや筋トレ、あるいは素振りなどを重ねて体を大きくしたり、動きを速くしたりします。

先日、知り合いのバレエ教室の発表会へ初めて行きました。老若男女日頃の稽古の成果を見せます。まだ幼稚園児くらいの小さなバレリーナが、隣の子の振りを見ながら、やっと踊っている姿は本当にほほえましく、かわいらしいものでした。また、シニ

アクラスの方々もおり、年齢を感じさせない生き生きとした踊りには希望を感じさせてくれます。プロのバレリーナによる演目もあり、これがいちばんの驚きでした。バレエは門外漢なのでよく分かりませんが、その踊りが本当に見事なのです。美しく洗練された手足の動き、高く美しい跳躍、まったくぶれずにスッと立った中心軸、どれをとっても一級品なのが分かり、すぐに引き込まれ「この人は、バレエの達人だ!」と目が離せなくなりました。もちろん、この方も初めからできていたわけではないでしょう。先に踊った子どもバレリーナの時代があったはずです。つまり、ながいながい鍛錬の結果なのです。「おおよそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われる」とあるように確かに辛いものです。しかし、鍛錬は、できなかったことをできるようにさせる、新しい気づきや成長を与えるものでもあります。生きているということは、理不尽なことの連続でもあります。たとえ洗礼を受けてクリスチャンになっても、人生の苦しみ悲しみはなくなりません。理不尽なことは理不尽な時に、理不尽にやってきます。しかし、その意味は変わります。「後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。」ここでいう義とは、相手との関わりを大事にし、それにふさわしい態度をとることです。わたしたちが救われた者であることに留まり、ふさわしい態度で主に望まないなら、いくら『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです』と言っても『お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ』と言われてしまいます。

第1朗読で読まれたイザヤ書では、「わたしは彼らのうちからも祭司とレビ人を立てる」と主は言われます。彼らとはユダヤの民ではなく、異邦人を指します。祭司やレビ人は、神に選ばれた特別な家系の中にいる人です。本来、異邦人はなれません。しかし、主は異邦人にもこの役割と恵みをお与えになるというのです。すなわち、神と人とをつなぐ人、神へと人々を導く証しとするとされているのです。子どもの頃から教会学校へ行き、ミッションス

クールに通い、洗礼と堅信を受けているから、教会の中の重職にあって、あの人この人を知っていて権威者の覚えめでたい存在だから、神の国での宴会の席に着けるのではありません。神の鍛錬をいとわず相手との関わりを大事にし、それにふさわしい態度をとることをやめない者が入れるのです。「そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者も」あり、そのことを受け入れることが求められます。



わたしたち人間が支配する国、社会は完璧とは程遠いです。一部の人利益を得て、そこからこぼれ落ちた人たちが割を食う世の中です。ニュース番組を見ていると、本当に国の為政者たちには失望します。結局は自己保身を欺まんで塗り固めただけの存在なのかとすら思います。また、個人に立ち返って、自分の人生を自分で支配しようとするとき、自分の小ささ醜さや愚かさに打ちのめされます。また、同じことの繰り返しだと。国とは支配・統治を表します。神の国とは、神の支配・統治なのです。わたしたちが、自分の有限な力、命、時間でこのことを量るのならば、苦しみの後の喜び、荒れ野の後の慰めを見つめて生きることは難しいです。しかし、神の鍛錬を耐え忍ぶ人、狭い戸口から入る人は、神の国というまったき安らぎ、永遠の命という超越した時間にその身を置くのです。

「家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまっただけからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである。」とあります。つまり、開いているうちに飛び込め!ということ。いま、自分がキリ

ストに招かれている、救いに呼ばれているんだと感じる人はいますか？もしそうなら、先延ばしにせず決断することをお勧めします。その戸口は狭いですし、いつまでも開いているものでもありませんが、東から西から、南から北からの多くの者に開かれているのですから。キリストは、あなたの救いのために十字架にかかれたのです。神の救いは全ての人に及びます。まだキリストを知らない人々に福音を宣べ伝えることができますように祈りつつ、ミサを続けてまいりましょう。

(撮影：編集部 土方芳人)

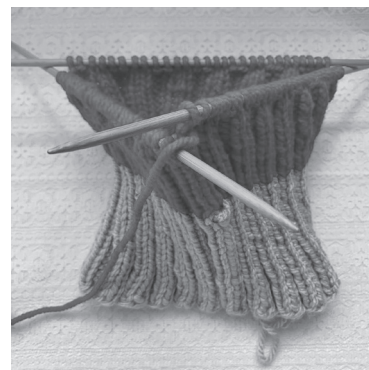
ロザリオ会の活動

2020年からのコロナの感染拡大により、ロザリオ会も本来の活動がほとんど行えないという状況でした。2019年5月にロザリオ会恒例の巡礼旅行で松が峰教会を訪れたのを最後に、大きなロザリオ会の活動は全くできずにいます。一時は第1金曜日のロザリオ会主催のミサも中止でした。そうした中でも役員が集まって話し合う機会は何度か設けてきました。また、現在はLINE（ライン）という便利な通信手段（アプリ）があるので、かなり頻繁に「語り」合ってきました。教会ホールや司祭・信徒館のトイレ掃除をすることも、互いの親密さを増したように思います。また、受洗された方や初聖体の方へのお祝い、司教様、神父様への叙階記念のお祝い、クリスマスプレゼントなど、活動とは言えませんがロザリオ会としての感謝を表す機会は失われてはいませんでした。また、ロザリオ会費を少しでも有効に役立てたいという思いから、聖堂修復、ウクライナ支援の寄附を行いました。また、9月14日には再び聖堂修復のために寄附をいたしました。

ロザリオ会員への連絡は家庭会を通して行われることがほとんどです。ロザリオ会を八つの地域に分けて、それぞれの地区に連絡係を置いて、役員からの連絡を連絡係に伝え、そこからそれぞれの家庭会員へと伝達するというシステムです。今まではバザーなどで、この家庭会を一つのユニットとして、さまざまな活動を行ってきました。活動はできない

状況ですが、家庭会を通してお知らせしたり意見を伺ったりしています。現在はメールという便利な手段があるので、スマホやパソコンへの一斉メールで連絡している家庭会もあります。しかし、さまざまな事情により家庭会には入らないという方がいることも十分理解しています。それでも、もっと多くのロザリオ会員が家庭会にも所属してくれることを切に願っています。意見交換をしたり、役員で話し合ったことを素早く伝達するためにも、家庭会という単位はとても重要だと思います。ミサに参加する機会が以前より減っている現状で、教会を遠く感じている信者の方も多いのではないのでしょうか？そうした中で家庭会という、このより小さな集まりは、帰属感をもたらすもののように思われるのですが。

まだまだコロナ終息の見通しは立ちませんが、少しでもロザリオ会としての活動を続けたいと願っています。夏にはステラマリスの活動の一つ、船員さんへの毛糸の帽子を編むための編物講習会を二度ほど開きました。編物の専門家ではありませんが、編み方がわからないという人のために開きました。それがきっかけで帽子を完成させ、更に船員さんのためだけでなく身近な人へのプレゼントにと編み出した人もいて、とてもうれしく思いました。



私は、こうした状況の中にあっても、自分には信仰があって幸せだったなあと感じることの多い毎日です。朝のお祈りの「…最悪の時にも感謝すべきものがあることを悟らせてください…」、この言葉を毎日かみしめています。私の家の北側の窓からは教会の鐘楼が見えます。夜には明かりがともります。その明かりが、本当に地上の灯台のように私には思われるのです。

(ロザリオ会 会長 山本紀志子)

ICCピクニック

山手教会の国際コミュニティ(常にICCと呼ばれています)は、コロナパンデミックの前に、いろいろな懇談会の機会を作っていました。毎月のコーヒーソーシャルと年2回のポットラックパーティー、また、毎年、春にピクニックを実施していました。しかし、コロナ対策のいろいろな規制により、このイベントは、ほとんど中止になってしまいました。

同じ教会の兄弟姉妹の皆さんとほとんど会う機会がなく、新しく来た人たちの名前と顔を一致させることも今はできません。

今年の春になって、ワクチンのおかげで感染の恐れが少なくなった環境で、ICC委員会で3年ぶりのピクニックを決めました。教会内ではなく外で行うイベントだからリスクが低いと判断しました。場所は、いつもの根岸公園よりも行きやすい山下公園にしました。みなブルーシートを敷いて、持ってきた食べ物と飲み物をシェアして2年間分の話をどんどんしゃべっていました。昔みたいにフィリピン人の奥さんたちは、おいしい料理を作って、みなに分けてくれました。

わがコミュニティは年々入れ代わります。フィリピン人は相変わらず、いちばん人数の多いグループです。二番目は、現在、インド人ですが、インドのいろいろなところから来ていますので、英語が共通語でありながら、それぞれの言葉も使っています(マラヤラム、タミル、ヒンディ語など)。一時期に多かったメキシコ人は、ほとんど帰りましたが、少なくなったフランス語人(フランスとアフリカ)は、

再び大勢になりました。東欧人は、いつもいますが初めてマレーシアの家族が来ました。そして、今年はダリル神父も来られました。

天気予報は、かなり悪かったが、2時までは問題なく、みな楽しんでいました。終わる頃に空が真っ黒になって若い人たちは、みな早く帰りました。年寄りの5～6人が間に合わず、木の下で豪雨の終わりを待つことしかできませんでした。

みなは、このイベントに対して良い思い出しかありませんでしたので、もう一度9月に歓迎ピクニックをしようと考えました。しかし、決めた日曜日に、次々と誘われていないのに台風が来ているので、いつできるか疑問です。でも、いつコーヒーソーシャルがまたできるのかわかりませんので、ぜひ、もう一度10月中に実施したいです。



(ICC代表 Pierre SEVAISTRE)

※日本語で原稿をいただきました。(編集部)

化石

化石は、子どものころから興味を持っていました。2010年1月にモロッコへ撮影旅行に行くための事前調査で、この国が世界有数の化石産地であり、デボン紀の約3億8千万年前に生息していたアンモナイト(約6千5百万年前に恐竜と共に絶滅)などが採れることが判明しました。実際に自分で探せないかと調べたところ、ある業者のツアーコースに「化石探し体験」が組み込まれていることが分かり、その業者の企画で行きました。

化石が出る場所はサハラ砂漠の一部で、日の出観賞をしたメズルーガ砂丘から四輪駆動車で2時間ぐらい走った粘土質の岩盤の上に岩石の破片が散らばっている広大な荒地でした。現地ガイドに連れて行かれた場所には、オルソセラス（オウムガイの祖先）やアンモナイトが岩盤に埋って地面に露出していましたが、そこには柵や囲いもなく、その場所を特定するための目印となるようなものもありませんでした。当然のことながら、見せていただいた化石は、観光客に観賞させるためのものであるため採集することはできず、その近辺でしばらく探すことになりました。私は化石があった場所の近くの岩石を手当たり次第に裏返しにして探し、幸いにも小さいものですが、表面に5つのアンモナイトがある約15cmの岩石を見つけ、ホテルに戻ったときに添乗員に見せると、たいへん驚かれました。メンバーで採集できたのは私だけで、目的は「化石探し体験」であり、最近では採集できた人は誰もいなかったとのことでした。

ここでは、アンモナイトについては、自分で採集できたことに満足して、小さなネックレス用の磨かれたものしか購入しませんでした。しかし、黒い石の三葉虫の化石を購入して帰宅後に調べたところ、古生代の一部のオルドビス紀（5億年から4億4千万年前の時代）に生息していたものであることが分かりました。なお、アンモナイトについては、同年3月にネパールに行ったときに、モロッコで販売されていたものより、さらに状態の良いものを複数購入することができました。



アンモナイト



三葉虫

(土方芳人)

編集経験者募集！

教会報『やまて』の編集をわたしたちとともに行いませんか。応募対象者は、編集（割り付け・校正）の経験がある方です。

編集部は、毎月最終火曜日の10時から12時まで司祭・信徒館に集まり、翌月に発行する『やまて』の原稿を読み合わせる編集会議を開いています。

集まるのは、この1回だけで、発行するまでの校正作業は、すべてメールで行います。

なお、この他に教会行事の取材、つまり、記事を書いていただきます。

応募を希望される方は、教会事務所までお申し出ください。

(編集部 編集長 土方芳人)

2022年9月度教会委員会議事要約

日時：2022年9月4日(日) 13:30～14:15

場所：司祭・信徒館1階「松・竹」

議事内容（議事進行：小倉委員長）

1 主な審議確認検討事案 ※順不同

(1) コロナ禍のミサと教会活動

- 現状などを踏まえ、今後もこれまでと同様の運用でよろしいか。

【決定事項】

- ・社会情勢に変化もなく、教会ホールの広さなどを鑑みて現状どおりの運用を継続する。

(2) 工事期間中の防犯カメラの設置について

- 工事用仮囲いが設置されているため、事務所から駐車場側の様子が全く見えない状況になっている。
- 日中の無断駐車や不審者の立ち入りなどへの対策を目的にWi-Fiで接続するカメラを設置したい。

【決定事項】

- ・承認。

2 今後の活動、報告事項

【典礼委員会より】

- 朗読者向けの勉強会を10月上旬に実施予定。
- 先唱者に向けた新しいミサ式次第による勉強会

を10月後半から11月上旬に実施予定。

- 新しいミサ式次第の冊子を原則として個人所有するようにし、ミサの際には自分のものを持参していただく。

【財務より】

- 来年度予算編成について協力をお願い。
- 横浜教区事務局より次年度予算の編成指示がある。来年度に大幅な出費の増減が予想される案件がある場合は財務に連絡すること。

【第2期工事関連について】

- 工事への献金・寄付金については、少額でも多くの方々の献金を期待したい。
- 来年春の工事完了後も聖堂修理のための献金は引き続き受け付ける。
- 現在、ICCグループの皆さんを対象とした献金要請の英語版がない。

➔「工事のお知らせ」の献金依頼の部分を英訳し配布する。

【帰天者のための追悼ミサについて】

- 11月5日（土）10時から11時まで教会ホールで追悼ミサを行う予定。
- 11月5日（土）の午後に合葬墓への納骨を行う予定。
- 2021年10月から2022年9月末までに帰天された方が対象。対象者を集計して案内ハガキを出す予定。
- ミサは教会ホールで行う方向。大人数になりそうな場合には制限をかけるなどで対応したい。

【福祉委員会より】

- ステラマリスでは、船員さんに毛糸の帽子を編んで送っている。協力者に2回目の毛糸の配布が始まるにあたり、ステラマリスの活動を広く知っていただくため、福祉委員会ニュースにステラマリスの紹介文を掲載した。
- ミニ福祉バザーの2回目を11月下旬～12月上旬に実施予定。

【サンモール・インターナショナルスクールの聖堂使用について】

- 2023年6月に、卒業生を送るミサを山手教会聖堂で行いたいという申し込みがあった。
- 工事完了後ではあるものの、コロナの感染状況を踏まえて検討する。

【幼稚園より】

- 10月15日（土）、入園する方に向けた説明会を実施予定。人数は30人ほどで、教会ホールを希望

しているが使えない場合には司祭・信徒館「松・竹」を使いたい。

- 横浜みこころ幼稚園では保育補助のパートさんを募集しているが、なかなか見つからないため教会の掲示板に求人票を貼らせていただきたい。

➔承認。

【教会学校より】

- 9月11日（日）、低学年クラスの2学期の始業と初聖体クラスの保護者会を実施予定。
- 9月18日（日）、高学年クラス2学期開始。

【ロザリオ会より】

- ロザリオ会の定期預金から聖堂修繕のために寄付する。
- 10月7日（金）ロザリオ会主催のミサを行う。

【ICCより】

- 9月18日（日）に「WELCOME PICNIC IN YAMASHITA PARK」を開催予定。

【事務所より】

- 9月4日（日）から22日（木）は、工事に伴う安全を確保するため教会ホールを閉鎖する。土曜の夜および日曜日のミサの時間についてのみ開放する。
- 今後、工事の状況を踏まえて通行に危険が見込まれる場合は、つど閉鎖、通行禁止などの処置を行う。

3 主任司祭から

- 9月17日（土）教区の学連の学生の集まりを山手教会の司祭・信徒館1階「松・竹」で行う。
- 8月13日（土）に磯子教会で予定していた教区の高校生の集まりは、台風により延期され9月23日（金・祝）に行うこととなった。
- 10月29日（土）に教区の青年の集いを磯子教会で行う。
- 10月16日（日）に予定されている第3地区共同宣教司牧委員会全体会は、司教館で行う予定。
- 葬儀ミサにおいて会衆は終始着席されているが、体調や身体的な理由を除き、通常のミサと同様に立っていただきたいと考える。葬儀ミサで先唱をされる方には勉強会の際にお話ししたが、改めて相談する。（西村師）

4 次回教会委員会

10月2日（日）13時00分～15時00分終了予定。

（総務担当 宮 裕一）

2022年10月・11月主日ミサの聖歌および奉仕者予定表

	主 日	聖 歌 (歌わずに章句を唱えます)			聖歌隊	時 間	奉 仕 者				ミサ参加 割当
		答唱詩編	アレルヤ唱	感謝の讃歌			オルガン	先 唱	聖書朗読		
10月16日	年間第29主日	典71 ②③④	典270 第29主日C	典205	前日pm5:00	村 松	山本(康)	工藤(元)	志 村	夜ミサB	
					7:30	渡 邊	末 澤	松 村	仁井田	朝ミサB	
					*	11:30	太 田	村田(義)	大 島	上 田	昼ミサB
23日	年間第30主日 世界宣教の日	典128 ①⑤⑥	典273 第30主日C	典205	前日pm5:00	忠 海	田中(麻)	羽 石	阿部(眞)	夜ミサA	
					7:30	太 田	亀 井	石 川	山本(真)	朝ミサA	
					*	11:30	中 川	藤原(ま)	中山(峯)	鈴木(理)	昼ミサA
30日	年間第31主日	典18 ④⑤⑥	典270 第31主日C	典205	前日pm5:00	藤 沼	山本(康)	志 村	櫻井(智)	夜ミサB	
					7:30	手 塚	時 久	上 村	早 川	朝ミサB	
					*	11:30	中 川	曾 禰	小 松	荻 原	昼ミサB
11月6日	年間第32主日	典113 ①②④	典274 第32主日C	典205	前日pm5:00	忠 海	竹之内	新井田	島田(節)	夜ミサA	
					7:30	太 田	石 賀	鈴木(幸)	鈴木(由)	朝ミサA	
					*	11:30	手 塚	山本(紀)	鈴木(理)	大 澤	昼ミサA
13日	年間第33主日	典149 ③④	典274 第33主日C	典205	前日pm5:00	村 松	斎 藤	鈴木(明)	福田(直)	夜ミサB	
					7:30	中 川	二 宮	東海林	時 久	朝ミサB	
					*	11:30	佐 藤	遠 藤	石 田	中野(説)	昼ミサB
20日	王であるキリスト祭	典173 ①②③	典266 王である キリスト	典205	前日pm5:00	藤 沼	山本(康)	工藤(元)	志 村	夜ミサA	
					7:30	渡 邊	末 澤	石 川	中村(桂)	朝ミサA	
					*	11:30	中 川	村田(義)	中川(由)	岩 隈	昼ミサA
27日	待降節第1主日	典173 ①②⑤	典255 待降節第1	典205 (未確定)	前日pm5:00	村 松	田中(麻)	羽 石	阿部(眞)	夜ミサB	
					7:30	手 塚	亀 井	古谷(浩)	藤本(茂)	朝ミサB	
					*	11:30	米 沢	藤原(ま)	中山(峯)	鈴木(理)	昼ミサB

編 集 後 記

山手の丘は樹木や草花が多いことから、さまざまな生物が生息しています。以前、この欄で山手教会前の大通りから JR 石川町駅に行く途中で、タヌキと遭遇したことを書きました。先月初旬、11時30分のミサに参加するため JR 石川町駅から山手教会へ向かう途中でギンヤンマに出会いました。狭い道路を歩いていると、前方に地面すれすれに大型のトンボが飛んでいるのを見つけました。このような飛び方をするトンボはギンヤンマしかいなので、立ち止まって観察していると小生の方に向かって飛んで来ました。小生のそばをすり抜けて行ったトンボは、まぎれもなくギンヤンマのオスでした。このトンボは全長7センチ、透き通った羽は広げると10センチにもなり、体全体が黄緑色の美しい昆虫です。オスは胸部と腹部の境界部分が水色、メスは黄緑色です。このトンボを観察することができたのは、大人になってから初めてのことです。ヤゴが生育できる湖沼が極端に少ない横浜は、トンボにとり厳しい環境です。この他、教会に行くまでのわずか10分前後の時間にシオカラトンボや大型の黄色いナミアゲハ蝶、羽を閉じると約1センチしかない、かわいらしいヤマトシジミ蝶にも出会うことができました。また、近くの山手イタリア山庭園では、ミンミンゼミやツクツクボオシが盛んに鳴いていました。

(土方芳人)

☆表紙のカット(山手教会)は、濱尾文郎枢機卿様の「えはがき」です。